

■**沢田吾一** 遅れて数学者になり、退職後(60歳)に、東大の国史学科に入学、社会経済史の基礎を築く大著を遺した。
さわだごいち
遣欧使節・・1861＝ 磐城平藩主の領地だった美濃国厚見郡野一色村で、庄屋沢田久平・美津の長男に生まれる。

数学者・歴史学者・歴史学学び奈良時代人口の数学的解析

明治維新・・1868＝ 7歳： 近所の寺などで、漢文の素読を学び、

初の日刊新聞1870＝ 9歳： 平藩の役人で、和算書も著した広江永貞から数学を教わり、

明治6年政変 1873＝12歳：小学校を卒業して、前年の学制施行でできたばかりの岐阜県立中学に入学、

琉球処分・・1879＝18歳：上等中学科全科を卒業。上京するが、
・・・・・1880＝19歳：帰郷し、県立中学の助教となるも、
明治14年政変1881＝20歳：再び上京、[{東京数学会社(東京数学物理学会)}]に入会、
新体詩抄・・1882＝21歳：陸軍参謀本部大佐浅井道博の家に寄寓し、三角測量課に勤務、

秩父事件・・1884＝23歳：機関誌{東京数学物理学会記事}に、論文「雨中彈道」を提出。

帝国大学始・1886＝25歳：会長菊池大麓の推薦で、第一高等中学校嘱託に転じ、
国民之友始・1887＝26歳：教諭となる。
初の対等条約1888＝27歳：東京数学物理学会懸賞問題に入選し賞状を受けると、
帝国憲法発布1889＝28歳：
帝国議会始・1890＝29歳：帝国大学理科大学物理学科の第三年級に編入学、
足尾鉋毒始・1891＝30歳：卒業。母校理科大学簡易講習所・駒場農科大学の嘱託となり、
大本教・・・1892＝31歳：金沢の第四高等学校教授に就任するが、

日清戦争始・1894＝33歳：
日清戦争終・1895＝34歳：{東洋学芸雑誌}に「光学実験法」。再び帝国大学の大学院に入学、
白馬会・・・1896＝35歳：中退、中央幼年学校付陸軍教授となり、母校理科大学講師を兼任。
八幡製鉄始・1897＝36歳：「算術新教科書」刊行。東京高等商業学校(現一橋大学)教授に転じ、商品学・経済数学とくに高等利息算・
生命保険数学などを担当、各種の数学書の著作に専念
Bushidou・・1899＝38歳：{東洋学芸雑誌}に「測時法」、教科書「解析幾何学大意」。

田中正造直訴1901＝40歳：{東洋学芸雑誌}に「数え方について」、
教科書疑獄・1902＝41歳：「代数学教科書」。

日露戦争始・1904＝43歳：教科書「微分積分学綱要」。
日露戦争終・1905＝44歳：菊池大麓と共著「平面三角法小教科書」。
満鉄発足・・1906＝45歳：

明治天皇没・1912＝51歳：

21ヶ条要求・1915＝54歳：

ロシア革命・1917＝56歳：20年勤めて、退職。

大暴落・・・1920＝59歳：*古文書の魅力に引かれ、東京帝国大学文学部国史学科に入学、主として上代史を専攻、
原敬首相暗殺1921＝60歳：

関東大震災・1923＝62歳：*卒業。その驚くべき学問研究への情熱は、
護憲三派圧勝1924＝63歳：

金融恐慌・・1927＝66歳：*富山房刊の「奈良朝時代民政経済の数的研究」の大著として結実、当時代の社会経済史研究の基礎を築いた
ものとして、学界に大きな影響を与えたが、学閥その他が災いして、学位を受けることなく、
共産党事件・1928＝67歳：奈良時代のことまで解説した「日本数学史講話」ほか、十数冊の数学関係の著書を残して、

満州事変・・1931＝70歳：肺炎で没した。

板倉聖宣「かわりだねの科学者たち」、